

---

# ノリで神様いじったら異世界で波乱万丈ライフ

くるる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノリで神様いじつたら異世界で波乱万丈ライフ

### 【Nコード】

N1511BA

### 【作者名】

くるる

### 【あらすじ】

ある夏の昼、俺はトラックにはねられて死んじまった。……はずなんだけど。自称神様の黒髪幼女が現れて願いを1つかなえてくれるとか言い出した。夢よ、早く、覚めろ。要望通り、夢は覚めた。けど、そこは俺が知っている世界とはだいぶ違っていたんだ。

異世界転生ものです。コメディー主体のかるーい感じのファンタジー、よろしければご覧ください。

## 神様いじり

「あつつい……わけわからない。だれが日本の夏をこれだけ暑くした……」

カゲロウ揺らめく8月夏真っ盛り。太陽が容赦なくアスファルトを焼いていく。その上を俺は左右にふらつきながらに進んでいた。

「頭いてえし……これ熱中症ってやつか？」

頭が唸るように痛い。聞いたことがある。これがテレビの人とかが良く注意してくださいねって笑顔で言っている熱中症ってやつだろう。あんなにこやかに冷房がガンガン聞いているところで言われてもまったく説得力がない。せめて今の俺と同じ境遇に立ったうえで話をしてくれ……って俺は何を言っているんだよ。どうやら熱中症の影響で思考がおかしくなってきたらしい。間違っても素ではないぞ、うん。

「こういう時ってどうすりゃいいんだっけか……水だったか？」

たしかテレビのお姉さんは「水分補給を忘れずに」なんていつていたな。気が付けば喉もカラカラだ。そう思ってた俺は顔を上げる。髪から滴り落ちる汗が気持ち悪い。黒いアスファルトから跳ね返る熱気に当てられて、今にも倒れてしまいそうだ。

「あ……」

けど俺はそんな中、視界の先にあかい大きな箱を見とめた。この国でよく見る某飲料会社のロゴが入った自動販売機だった。その中

には俺の渴きを潤すべく待っているとしたか思えない炭酸飲料たちが……俺は一步踏み出す。あれってオアシスじゃね？

「あ、あ、あ……」

踏み出すたびに俺の口からなにやら人語とは思えない声上がる。頭は波にのまれる葉のように揺れて、視界ではいまや地面が空になつていた。空が地面に。あれ、今度は空が空だ……やばい、混乱してきた。それでも俺は歩みをやめない。一途に自動販売機という真夏唯一のオアシスを目指す。けどそれはどう考えても過ちだった。そう、決定的に。けどそれに俺の正常でない頭は気が付かなかったんだ。

鳴り響くクラクション。点滅する照明。運転手の驚愕に満ちた表情。俺はどうやら国道の中央に向かって飛び出ししまつていたらしい。

あ、どうやら俺は死ぬ。なんとなくだけどそう思った。いや、確信だな。右隣に自足60キロメートルで迫る何トンあるのかもわからない巨大なトラック。相対する俺、体重64キロ、もやし。どうあがいても俺は死ぬ。回避不可能な決定事項。走馬灯なんて言うのは一切走らなかつた。ただただふだんよりも長く感じる時間の流れ。迫るトラックのナンバーを見る余裕すらある。けどそれは相対的な時間。俺もその中では同じくゆっくりとしか動けない。回避不可能。俺はゆっくりと死に近づいて行って……俺は死んだ。

はずだったんだけど……

「おっす。少年」

「だれだよ。お前」

「神様」

「……あつそ」

死んだはずの俺にはまだ意識があった。周りは真っ白だった。雪……じゃないよな。ここは東京。しかも夏の最盛期。容赦のない生き地獄に入り始める季節。それにげんなりしながらうちわを持って俺は今日学校へ向かっていたはずだ。俺はこんな風景を知らない。じゃあきつと夢だろう。そう断定する。なにやら雲の上のようなふわふわしたところに俺は立っている。時折縦に揺れる。少し酔ってしまいうそだ。周りの状況はだいたい把握した。ここは夢の中で、俺の妄想が具現した不思議空間なんだろう。

んで問題はこれだ……この子は誰だろう。小さな女の子。白いワンピースに身を包んでいる。その肌はワンピースの白と比べても遜色ないほどに傷一つない白そのものだった。少し病的にすら見える。しかしそれに反して長い彼女の髪は深い黒に染まっていた。ワンピースの生地を押し上げるような胸のふくらみも、女性的な曲線も見られない彼女、年は……8歳くらいか？

そして問題である。なんでこんな子が俺の夢空間にいる？俺は別段小さい子に興味があるわけではないし、むしろもつとメリハリボディのおねえさんが好きなのだが……おい、夢、チェンジで。

俺が指を彼女に向けて怪しげな仕草をしていることに不信感をもったのか少女は言う。

「神様だぞ？」

しかも電波ちゃんである。俺は夢の中の自分の趣味を本気で疑い始める。けど少し楽しくなってきた。ここは夢の世界のようだし、好き勝手やらせてもらうぜ！

「そうなのか。んで、ここはどこだよ。学校に遅れちゃう」

「神様だよ？」

「そっか。最近はそう言う遊びが流行ってるのか」

俺の時なんて特撮のまねごと位しかしてなかったけどな。最近はエラく独創的なんだな。

「無礼だね……」

小さな唇をとがらせていう。すこしだけ悲しそうな顔をしているがそれもなんだかわいらしい。

「お前こそ年上は敬えよ」

はっ……いかんいかん。俺は自分の大人気のなさにそこで気が付いた。やってしまった。年長者の余裕を見せてやらねば……。

「あ、わりい。ほら、飴ちゃんあげるからな。何味がいい？」

「イチゴ……ではなくてだなっ！」

少女が何か言おうと口を開ける。それにかぶせて俺は言った。

「メロンか？」

「それも好き！じゃなくてだなっ！ワタシは神様だぞ……！」

こいつマジに少女だ。というか幼女。神様な訳がない。というか俺、俺の趣味がわからんぞ。マジで。

「そっついわれてもな。証拠あるのかよ。証拠」

俺は意地悪く言う。雲の上に立つのも慣れてきたもので、なんだか心地よくなってきた。

腕を組んでふんぞり返る。ドラマでよく見る悪役のポーズだ。

「ない！」

断言かよ……

「じゃあ信じない」

ならば仕方ない。こちらも断言だ。そもそもここが夢空間であることを知っている俺に負けはない……何と張り合ってるんだろ、俺。

「うぬう……仕方ないのお……」

すこししょぼくれた少女は軽く手をかざす。すると白の空間の上にいくつかのカードが浮かぶ。そこには達筆な筆文字で何かが書かれていた。うん？「不老不死」？「最強」？「ハーレム」？「波乱に満ちた人生」？わけわからん。

「ほれ、この中から一つ選んでみよ。かなえてやるぞ！」

そういつてない胸をそらす。えっへん。やめとけ。切ない。それにしても俺の夢、こってるなあ……ここまで鮮烈な夢を見るのは初めてかもしれない。

「「言うは易し、行ふ難し」って知ってるか？幼女」

「幼くないぞ！ワタシはお前より何倍も生きているのだっ！」

「わかったわかった幼老女。んで知ってるか？」

「……… 幼女にそのようなボキャブラリーはないのだ」

幼女は人差し指の先を合わせてモジモジ。視線を落とす。おい、そこまで沈まないでくれ。俺が悪いみたいじゃないか。悪いけども。

「ま、ようするにいうだけなら簡単だってことだよ」

「なんだおぬし！ワタシがかなえられぬとも思っているのか？」

「うん。そりゃあもう。お前さ、不老不死なんて今まで何人も求め続けて挫折してきた人間の命題みたいなもんだぞ。それを軽々しく言われてもなあ」

「神様に不可能はないのだっ」

そういつてまた胸をそらす。喜怒哀楽の激しい神様だ。もし昔の言い伝えみたいにこいつと天候がリンクしていたらかなり厳しい天候が繰り返されただろう。台風のち全球凍結とかさらにありそうだ。

「わかった。わかった。どれか一つ選べばいいんだろう？」

目の前に浮かぶ4枚の札をみる。いざ眺めてみると一つ以外はとても魅力的だ。

「ふふん。やっと真面目に考え始めたか」

えらそうに上のほうの雲から言う。俺も飛んだらあそこまで行けるのだろうか。

「一応おまえが神様だったら損だろ？」

「ならば先ほどの態度もどうにかならなかったのかの……」

「ほら、神様いじりました、とか友達に言えるじゃないか。軽い小話にでもさ」

友達いないけど。

「であつた時点で小話ではないわいっ！おぬしは恵まれているのだぞっ」

「ま、それはお前が神様だったらだろ」

「だーかーら！」

短い両の腕をぱたぱたとふる。それに合わせてつやのある髪がなびく。しかしふと幼女が動きを止めた。その可愛らしいくるりとして目で俺の事を見ている。

「今度はどうした？」

「ふふん。わかったぞ。おぬしの望みが！まったくいつまでたつても男というのは分かり易い！」

「何の話だよ？」

この子、相当に電波ちゃんだ。俺が知ってるアニメにもこういう子がいて、かわいいなあなんて思っていたが……リアルは少し、きつい。

「しらばつくれても無駄だぞ、少年。どうせハーレムにしてくださいなどと言うつもりだったのだろうっ！」

うん？

ほう。この娘なかなかやりおる。確かに今、俺はそれを選択してみようとは思っていた。

「証拠まであるぞ」

胸をそらす。どうやら癖のようだ。しかも今回はそり方が尋常じゃ

ない。自信と比例でもしてるんじゃないだろうか。

「なぜなら、今！貴様は私のことを嫌らしい視線でみていたからだっ」

「……いや、ごめん。外れ。それは、ない」

即答。ない。悪いが俺にそんな趣味は、ない。あまりにも早い返答に幼女の胸の反りが弱くなる。自信に比例してるんじゃないか、マジで。

「俺がそれを選んでみようと思った理由は言えば消去法だよ」

「しょーきよほう？」

「不死なんてそのうちあきそう。最強なんて今の世界あやふやすぎる概念だ。信用ならん。波乱に満ちた人生。俺は平和に暮らしたい以上」

「お主、夢がないのう……」

「リアリストなだけだ」

「ほう、でもおぬしの顔でハーレムはリアルでないのお」

うるせえ……知ってるわ。

「けど俺がハーレムを成し遂げることより、お前が神様であることのほうがありえないだろ。ほら、大体神様ならもつと豪気にしてみろよ。全部かなえてやるッ、とかさ」

幼女の言うことが俺の心を傷つけた。……知ってたが言われるときついんだぞ。少しだけ仕返しをしてやろうと思ってそんなことを言っただが……

「もういいわ！良いだろう。おぬしの望みすべてかなえてやる。あ

とで私が神様だと知って自らの無礼を恥じるがいいわ!」

そういつて少女はどこかへ消えてしまった。

「えっと……」

俺の周りには4つのカード。彼女がかなえてくれるといった4つの希望。白い空間には俺とこれだけが残された。どうしようかななどと思っていたが俺はここが夢の世界であることを思い出す。そのうちさめるのだ。俺はそれを待つことにした。

いっはぎいでしょう

「ふあああゝよく寝たぜ」

白一色だった世界。俺はしばらくあそこに一人取り残されていた。けど脱出にそんな時間はかからなかった。幼女が消えて話し相手がいなくなって実は不安になっていた俺は、周りのカードの圧迫感と雲のふわふわ感が相まって非常に居心地が悪いな、なんて思って立ち尽くしていたんだが、気がつくと俺の意識は消滅していて、再び意識を取り戻すと、俺は地面に寝転がってどこまでもすんだ青空を仰ぎ見ていたんだ。

「そりゃ夢だよな」

それはそうだ。自分でそう判断したのだ。そもそもあれが夢でないとするなら、俺はトラックにひかれて無残な様で息絶えているだろう。ばたんきゅー。

「このリアルな感覚は間違いなく現実だな。俺の体だ、夢じゃない」

俺は今生きている。それがあれが夢であったことの裏付けになるだろう。さてと、そうなると学校を目指さないといけないな。そろそろ起きるか。今日は天気がいい割に涼しいしな。久しぶりにモチベーションが上がってきた。

そんな俺を応援するように日は暖かく照りつけ、むき出しの地面は柔らかく俺の背中を支えてくれる。時折吹き抜ける風が草原の草木を小さく揺らす……ん、まて、草原？

俺は自らの視界を疑った。何故に草原なんだ？なぜ俺の周りに様々な草木が生い茂った世界が広がっている？俺が住んでいたのは日の

国日本が首都、東京のど真ん中であつてそこは黒い無機質な世界だぞ。剥き出しの地面などなかなかないし、ましてや草原なんてあるわけがない！

「なんじゃこりゃ……」

俺は勢いよく立ち上がる。あたりを見回すとそこは見紛うことなき大平原であつた。見渡す果てまで緑一色。平坦な陸地が地平線まで続いていく。

「なんじゃこりゃああ！」

リピート。勿論言い直したところで現実是不変。夢か？夢がまだ続いてるのか？

「いたっ」

頬をつねる。普通に痛いんだけど……これ、夢じゃないのか？俺は自らのおかれていた状況を把握するためにもう一度あたりを見回してみる。

「でけえ山だな……」

振り向いた先には天を貫く大山脈。雲を裂きそびえる山頂は伺い知ることができない。

「立派な川だこと……」

その右側には大河が流れ。

「こつち側は遙かに続く大平原……」

この勇壮な大自然のど真ん中で俺は立ち尽くしていた。美しい、あのままの自然。どこにも人がふれた形跡のない自然のありように俺は素直に感嘆していた。

「すげえ……」

いくらほどそういつて固まっていただろう。しばらくすると一つの疑問が浮かび上がる。

「んで、ここ、どこ？」

一人、風に問いかける。勿論、風が答えるわけもない。だが、しかし、あえて問う。ここはどこだ！

ひゅー。

風が無言で去って行った。

「訳がわかんねえ、どう考えてもあれは夢だっただろうが。なら夢オチで戻るべき世界は俺の家のベッド、すなわち！まだ夢は続いているっ！」

顔を自ら猛打する、俺。……やばい、くそいたい。いろんな意味で、イタい。さっき自分で確認したじゃねえか、ちくしょー。

よし、冷静になれ、ならここはどこなんだ。思考しろ。あれが夢であつた、というのは俺的には譲れない。なぜならそうでないと俺は死んでしまうからだ。簡単な話である。

「ということとは、だ」

可能性は一つ。寝ている俺を何者かが誘拐し、ここまで輸送して解放した、それしかない。しかし、何のためにだ？

「……俺はいつの間にか知ってはいけないことを知ってしまい某国の機関に……ないなあ。その場合は俺、殺されてるよ」

その場にへたり込む。もう一度仰向けに寝転がって、空を眺める。山から生まれた雲が、平原の向こうへ流れていく。実を結ぶことのない思考は、ただただつらいものだった。そんな俺の脳裏に一つの仮定が浮かび上がる。しかし、これは……

「あれが夢じゃなかった……ってことか？」

俺もにわかには信じ難い。謎の自称神様の幼女。彼女がかなえてくれた、いや、かなえるといっていた望みとはなんだったか。

「ハーレム、最強、波乱に満ちた人生……不老不死なんて言うのもあったか……」

もしま、もし、万が一、だ。あの幼女が神様だったとして、あの子の力で俺はよみがえり、不老不死になって復活ポイントみたいなのところから再湧きした……可能性としてはないことはない。もしくはここは死の国である……いまや選択できるのはその二択だ。

「前者なら確かめられるな……」

復活ポイントで再湧きしたかどうかは定かではないが、もし俺が不

老不死になっているのなら……

「一回死んでみるか」

一度死に瀕するほどの一大事、それこそトラックへの衝突とかそういう「確定的な死」に出会い、「死ななかったら」俺は不老不死になっている、つまり幼女は本当に神様で俺は望みをかなえられたということになる。しかし、死ぬ、その行為はまさに「言うは易し、行ふは難し」だ。どう考えても俺は死のうとなんてしない。きっと最後の最後には防衛本能が働いて、「重傷」になって一番つらくなるパターンが見えている。

「なら、殺される、つてのはどうだ」

抵抗しようにもそれ以上の力で迫られてしまえば抵抗は無為に変わり俺は死ぬ。仮定の上ではここは死の国かもしれないのだから、もし死んでしまっても……まあ問題はない。

「けどこの大平原じゃなー」

俺は寝そべったままにつぶやく。俺と似たような身体をした人間みたいな動物はいないし、ましてや俺の言葉が通じるのかどうか怪しい。大体「ころしてください」なんて頼んでも十中八九お断りだろう。

「じゃあ死ねないな」

別に死ぬのが怖いわけじゃないぜ。だってもう一度体験してるし、うん。怖くない。

「どうしようかな」

そういつて寝返りを打つ。草の感覚が肌に心地がいい。一度視界が土の茶色に代わってまた戻ってくるのは青い世界。美し……

「ヴえ……？」

俺の頭上に青い世界は広がっていなかった。そこにあつたのは何かの顎門。俺の顔の大きさぐらいはあるだろうか、犬の顎門のように見えるそれは時折苦しげに上下する。顎門のわきからは大きな牙がむき出しになって生えている。紅い歯茎と相まって非常に攻撃的な色合いをしている。時折吹き出す息は腐った卵のようなにおいがして非常にくさい。

ぼとり……

俺の顔に何やら粘性のある液体がかかってきた。額ほどに当たったそれはゆっくりと俺の唇ほどにまで伝い落ちてくる。すこし酸味のあるそれは俺の鼻孔を小さくくすぐる。

「ええつと……」

俺、その上に犬のものと思われる顎門、そして苦しそうにたらすよだれ。俺が涎をたらすときはどんなときだ？すなわちそれは空腹の時、それも相当に。思考は一瞬……

「お断りしますッ！」

逃げる、一択だ！

俺が飛び上がって駆け出すのにわずかに遅れ、犬と思しき巨大な何かは俺を勢いよく猛追し始める。流石自然の動物、瞬発力が伊達じ

やない。

しかし、俺は全力で逃げる。

喰われるわけにはいかない。俺は死ぬ気など、ましてや殺される気なんていうのもさらさないのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1511ba/>

---

ノリで神様いじったら異世界で波乱万丈ライフ

2012年1月5日21時53分発行